

研究区分	教員特別研究推進（教育推進）
------	----------------

研 究 テーマ	周術期の薬物治療管理能力を醸成する実務実習				
研究組織	代 表 者	所属・職名	薬学部・教授	氏名	内野 智信
	研究協力者	所属・職名	薬学部・教授	氏名	辻 大樹
		所属・職名	薬学部・講師	氏名	横山 匡
		所属・職名	薬学部・助教	氏名	杉山 恭平
	発 表 者	所属・職名	薬学部・教授	氏名	内野 智信

講演題目
周術期の薬物治療管理能力を醸成する実務実習の評価
研究の目的、成果及び今後の展望
【目的】 近年、医師の過重労働抑制の取り組みとして医師の業務を看護師や薬剤師などの他の職種に一部移管したり、共同化したりするタスクシフトの必要性が強く求められている。その中の業務の一つとして、「周術期薬剤管理」がある。「周術期」とは、手術が決定した外来から入院、麻酔・手術、術後回復、退院・社会復帰までの、患者の手術前後を含めた一連の期間のことである。一般に、この期間は複雑な薬剤管理が必要とされることから、2022 年度の診療報酬改定により薬剤師が患者の周術期の薬剤管理を厳格に行うことによって、診療加算を算定できるようになった。この「周術期薬剤管理」の実施に伴い、周術期の薬物療法が適正化されるだけでなく、患者の QOL 向上や医療経済学的なメリットも報告されてきている。静岡県立総合病院(SGH)において、本学教員が主導で薬剤部と共同で行う病院実習でも、2022 年度より手術室担当の薬剤師を中心に「周術期薬剤管理」を積極的に導入している。担当薬剤師は、医師との情報共有に基づいた積極的な処方提案を行うことで、実際に提案内容が処方に反映されることも多く、医師から高い評価を得ている。この周術期薬剤管理を適切に実施するためには、専門的な薬物療法の知識と病態、また患者毎の適性に応じた処方提案能力が必要となる。そこで、2025 年度は消化器外科で胃や大腸などの消化器系のがん患者を対象に周術期薬剤管理の体験実習を企画し、周術期の薬剤の処方設計・提案能力の醸成を図ることを目的として実習を行った。 【成果】 令和 7 年度に SGH で病院実習を行った実習生 23 名のうち、実務実習中に消化器外科病棟での実習配属のあった 19 名を対象として実習を展開した。実習生は、周術期薬剤管理についての講義を担当薬剤師から受講し、処方提案や処方設計に必要な知識を習得した。習得後、実習生は周術期薬剤管理に必要な HCU 病棟に入院中の患者情報を収集し、周術期薬剤管理をシミュレートしたのち、教員・指導薬剤師からフィードバックを受けた。その後、実際の周術期の患者の服薬指導を行うために教員・指導薬剤師が模擬患者となり、服薬指導のシミュレーションを行ったのち、実際の服薬指導を行った。これらの教育効果の評価を、周術期薬剤管理教育の実習を遂行する前後でのプレ・ポストテストにより評価したところ、プレおよびポストの平均値はそれぞれ 6.3 ± 1.1 および $7.1 \pm 1.2(\text{mean} \pm \text{S.D.})$ となり、本実習の教育効果が認められたものと推察された ($n = 19, P < 0.05$)。 【今後の展望】 周術期における薬剤師の役割については益々重要性が増してくることが予想される。また、手術前後では一般病床では使用頻度の低い薬剤が使用されることも多いため、これらの経験と知識を学生が実務実習で直接体験できることは非常に有意義と考えられる。2026 年度も同様の実習を展開し、教育効果のさらなる検証を進めていきたい。